

中川宋淵老師

石の声

石がささやく

秋ふかく

實相寺花園会報

令和五年 十一月一日発行
発行所 臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会

〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1

TEL087-889-3838
編集発行人 山本文匡

https://www.jissouji.net

第175号

『ある日の法話より一 いろいろにはほへと』より

円覚寺派管長 横田南嶺老師

お寺の揭示板
三島・龍澤寺の中川宋淵老師がこういう句を残してくださっています。

われわれは、坐禅して無心になるといいますが、それは周りのことがわからなくなる、聞こえなくなるようなことでは決してありません。むしろ「石がささやく石の声」も聞こえてくるようにならないといけません。

図1-1-8 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世界帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合

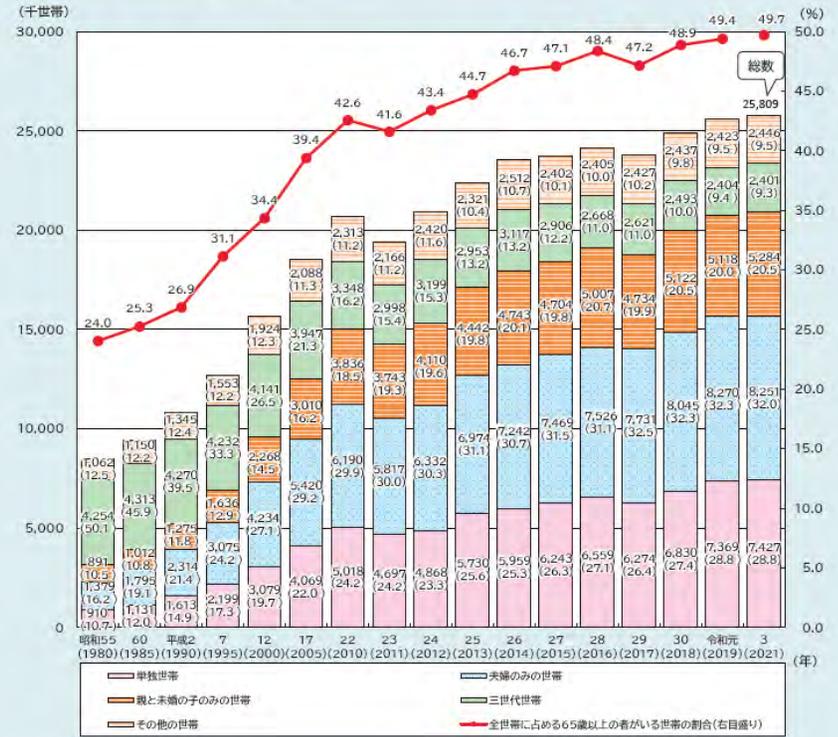
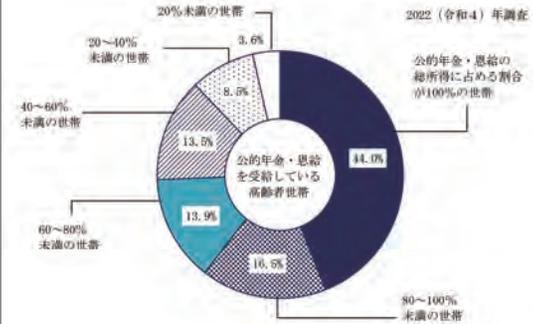


図11 公的年金・恩給を受給している高齢者世帯における公的年金・恩給の総所得に占める割合別世帯数の構成割合



「これからのお寺の役割とは⑤」
 昨年12月に全日本仏教会が実施した1万人規模のアンケート調査によると、男女ともに60代、70代の約3割が「菩提寺はない」と回答しているのですが、そのうちの約7割は「菩提寺を持つことを考えていない」と答えています。

この「菩提寺の必要性」を尋ねた質問に「必要なし」と回答した割合は20〜30代で約5割、40〜50代で約6割と、年齢が上がるほど高くなっているのが特徴です。一般的に、お寺とのつきあいは年齢が高くなるほど増えるものですが、いわゆる「団塊世代」以後の高齢者は、それほどお寺を必要としないという傾向が伺えます。

その原因には家族構成が変わったことが影響を与えていると思われる。

内閣府の令和5年度版「高齢社会白書」によると、昭和55年（1980）、高齢者のいる家庭の半数は3世代同居でした。しかし令和以降、祖父母と孫が一緒に暮らす家庭は1割以下です。

この40年間で高齢者のいる世帯は3倍に増え、全世帯の半数が高齢者のいる世帯になりましたが、その内訳は3割が一人暮らしの高齢者世帯、同じく3割が夫婦だけの高齢者世帯、さらに未婚の子と暮らす高齢者世帯も2割に増えていきます。

また厚労省が今年7月に発表した令和4年「国民生活基礎調査の概要」によれば、公的年金や恩給を受給している高齢者世帯の44%は他の収入がなく、16%が全収入の8割以上を年金や恩給に頼っていることが判ります。こうし

た状況では、葬儀法要に費用を掛けられないという事情も理解出来ます。

これらの社会的背景から、寺院経営は今後ますます厳しくなることが予想されますので、住職も今年5月から「未来の住職塾」というセミナーを受講しました。以前から興味はあったのですが、今年からオンライン受講が可能になったので、半年間全6回で15万円と安くはない受講料を払い受講しました。しかし、残念ながら住職が思うような学びには繋がっていませんでした。

結局はどうやって納骨やお葬式を獲得するか、という経営コンサルでした。その手法は一般企業でも行われているものですが、いかに他寺よりも抜きん出るかという観点での指導を受けました。でもそれが仏教寺院のあるべき姿

だとは思えません。

インドでは13世紀に仏教が滅びました。原因は諸説ありますが、その中の一つに仏教自身の変節もあったと言われます。本来出自に依らない筈の仏教が、ヒンズー教化し出自をいう様になった。その結果、反カーストの人達はイスラム教になったという説です。

日本の仏教は世界的に見てもかなり特殊な面がありますが、それでも本質的には仏教であったからこそ、これまで続いてきたのだと思います。何も先祖供養だけが寺院の役割なのではありません。合理性や効率率が重視される社会風潮の中、寺院や僧侶は一般社会とは異なる価値観があることを身を以て示すことこそが、仏教本来の役割ではないかと思うのです。(完)